

# 西新井税務署長賞

## 「見えない力、税金の輪」

足立区立 第十中学校

三年 長田 優依

夏休みに入る少し前、私たちの学校では税理士の方による租税教室が行われた。今まで税金に関心の薄かった私にとって、税金について知り、興味を持つきっかけとなった。

そのなかで、私が最も印象に残っているものは、「公正」なお金の集め方と「平等」なお金の集め方の違いについて考えるという話だ。例えば、三百万円を三人から集めるとき、全員が百万円ずつ出すのは「平等」といえる。しかし、もし三人の経済力が大きく異なれば、それは「公正」ではない。では、国の税金はどうだろうか。税金は年収や家庭の事情などに応じて金額が決められている。よって「公正」な集め方といえるだろう。そこに私は、税金の大切な役割が関わっていると思う。

国の全体のお金の量は変わることがなく、常に政府、個人、企業の財布を移動しているだけに過ぎないそうだ。私は、その経済の仕組みがお金の奪い合いのように感じた。すると当然、伸びる会社や潰れる会社、バリバリ働ける人や病気や障害であまり働けない人が出てくるため、お金がシーソーのように偏ってしまう。そこで、政府は稼いだ人から税金を多く取り、それを全体のために使いつつ、お金を循環させているのだ。つまり、公正に税金を集めることが国民間の格差を緩和し、お金を循環させることにつながっているということになる。

私は、租税教室だったり、自分で税金について調べたりしたことで税金に対するイメージが大きく変わった。「もし、税金がなくなったら…」と考えたとき、以前の私なら「お菓子が安く買えてラッキー」くらいにしか思わなかっただろう。だが、今の私は税金がなくなったらいいことばかりではないと考える。例えば、学校が営利団体になり、勉強が贅沢なものになってしまいかもしれない。また、私の大好きな図書館などの公共施設が有料化してしまいかもしれない。そうなってしまったら、どんどん格差が広がっていつてしまう。それは、とても恐ろしいことだと思う。

私の好きな言葉に「ワン・フォー・オール、オール・フォー・ワン」というものがある。「一人はみんなのために、みんなは一人のために」という意味だ。税金もそういうものではないか。誰かの支えがあつて、私は今日も豊かな一日を過ごせているという紛れもない事実がある。そのことに感謝の気持ちをもつていきたい。また、大人になるにつれ、税金に関わる機会も増えていくと思う。私は社会の一員として、誰かのために責任をもつて税金を納めていきたい。そして、税金の仕組みを正しく理解し、社会に貢献できる大人になりたいと思う。